【600】

氏　　名	山本（信田）千佳（やまもと のぶた ちか）
学位(専攻分野)	博　士（人間・環境学）
学位記番号	人博第 334 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	The Comparison between Japanese Compound Verbs with "～*Ageru*" and English Verb-Particle Constructions with "～ Up" （日本語の複合動詞後項「～あげる」と英語の不変化詞"～ Up"の比較）
論文調査委員	（主査）教授 三谷惠子　教授 山梨正明　助教授 河崎　靖

論文内容の要旨

本論文は「～あげる」を伴った日本語の複合動詞（Japanese Compound Verbs）と，"～ Up"を伴った英語の不変化詞—動詞構文（Verb-Particle Constructions）の比較によって，空間的意味（上方への移動）を表す「～あげる」および"～ Up"が非空間的意味（強調や完了）を表すようになるプロセスを，認知言語学の立場から明らかにしようと試みたものである。

全体は7章からなり，末尾に日英対訳テクストの資料を補遺として付け加えている。

第1章は短い序論であり，問題提起と第2章以下の内容についての概略が示される。続く第2章では，まず日本語の複合動詞に関する代表的な先行研究の概観が示される。とくに本論文のテーマである「～あげる」に関して詳細に論じた先行研究について批判的分析がなされた上で，さまざまな意味を表現しうる「～あげる」を統一的に説明するためには，文字通りの意味と比喩的意味の関連を，明確に記述する必要があることが指摘される。ついで，「～あがる」と「～あげる」の自他交替，「～あげる」と「～おえる」の相違について考察した上で，本論文で議論する範囲を，他動詞連用形に「～あげる」形が付加された複合動詞に限定することが述べられる。

第3章では，英語の不変化詞と前置詞の違い，また不変化詞—動詞構文と動詞—前置詞構文の統語論的特徴について，従来述べられてきたことがらをまとめる。英語の研究においては，たとえば動詞とともに用いられる up や down のような要素を前置詞とみなすか，不変化詞とみなすかについて，統語論的な基準を用いて判断する試みが多くなされてきた。しかし語順に注目する統語論的アプローチによって常に両者が明確に区別されるわけではなく，意味的なアプローチが必要であることが指摘される。先行研究の概観を踏まえて，本研究では他動詞を用いた不変化詞—動詞（transitive Verb-Particle Constructions）に議論を限定することが示される。

第4章では，「完了のアスペクト」を表す「～あげる」と～ up に焦点をあて，日本語と英語それぞれで該当する表現を対照的に検討する。その結果，英語では対象が減少して完全になくなるタイプ（eat up）や対象が分割されてもとの状態を完全になくすタイプ(cut up)など，～ up で表される完了のサブタイプのいくつかが，日本語の「～あげる」には適応されないことが明らかになる。このように，具体的な分析の手続きを経て，～ up と「～あげる」に見られる共通性と差異がまとめられる。

第5章では，「～あげる」と～ up のさまざまな意味と，そこに結合する目的語の属性との関係を明らかにするために，日英対訳データベースから収集し分類したデータが示される。ここでは，たとえば，空間的移動を表す場合の目的語は，基本的に具体的かつ定量的なものであるが，逆に具体的・定量的な目的語は，空間的移動のみならず完了の意味（「ナイフを磨きあげる」）や比喩的意味（「彼を持ち上げる」）においても現れるというように，複雑な対応を示していることが明らかにされる。

第6章では，前章までに観察した具体的な言語事実が，認知意味論の枠組みで整理される。本論文では，「起点—経路—目標のスキーマ（source-path-goal schema)」ならびに認知プロセスとしてのメトニミー，メタファーの概念を援用する。

そして「～あげる」と～upの表す意味を「文字通りの意味」と「比喩的意味」に分け，それぞれを上記の「起点—経路—目標のスキーマ」と関連づけることによって，VERTICAL（AGERU-1, UP-1），GOAL-ORIENTED（AGERU-2, UP-2), CONVENTIONALIZED（AGERU-3, UP-3）の3つのタイプが取り出されることが示される。

VERTICALでは，動詞も「～あげる」・～upも本来の意味で用いられ，対象が上方へ移動する空間的移動の意味が表される。GOAL-ORIENTEDでは，動詞は本来の意味を持つが，後続する複合要素が比喩的意味として作用し，その結果，複合表現全体としては動詞が表す行為や事象のいわゆる「完了」が表される。この段階は，メタファー的な意味の拡張としてとらえられるものである。CONVENTIONALIZEDでは，「(問題を）取りあげる」のように動詞も複合要素も比喩的な意味を表し，もとの動詞の意味から比喩的に派生した状況の完了あるいはそれに向けた行為や事象が表される。これはメトニミー的拡張として説明される。また語彙や使用される文脈によって，「完了」の意味になったり，あるいは完了をめざす行為の意味になったりするのは，「起点—経路—目標のスキーマ」のどの部分が焦点化されているかによる違いであると理由づけられる。

第7章はまとめであり，認知言語学のイメージスキーマと，メタファーやメトニミーといった枠組みによって，「～あげる」ならびに～upの多義性が相互に関連づけられて説明されることが強調されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は「～あげる」を伴った日本語の複合動詞（Japanese Compound Verbs）と，“～Up”を伴った英語の不変化詞—動詞構文（Verb-Particle Constructions）を比較することによって，空間的意味（上方への移動）を表す「～あげる」および“～Up”が非空間的意味（強調や完了）とどのように関係づけられるのかを，認知言語学の立場から明らかにしようと試みたものである。

日本語の複合動詞，また英語の不変化詞?動詞構文に関してはこれまで，統語論，意味論双方からさまざまなアプローチがなされてきた。しかし日本語と英語で，ともに上方への移動を表すという点で共通する「あげる」と，upを含む複合表現を対照的に取り上げ，詳細に論じた研究は先例がない。また，先行研究で十分に論じられてこなかった，これらの表現が表す多様な意味の連続性に注目し，認知意味論的解釈によって記述しようという本論文の試みはきわめて意欲的なものということができる。

本論文は，認知言語学の研究として位置づけられるものだが，その理論的考察に先立って本論文では，当該の構文の特徴をさまざまな角度から検討している。具体的には，「あげる」に対する自動詞の「あがる」，あるいは同じように完了の意味を表す「おえる」など関連する意味を表す構文との比較，アスペクト性の異なる動詞が複合動詞を形成した場合に現れる意味の違い，日本語と英語で観察される共通点と相違点など，言語事実を個別に詳しく検討している。言語の理論研究では時に，このような詳細な言語事実の観察なしに，ややもすれば都合のよい例のみを用いて分析を進めようとする研究が見られるが，どのような理論の枠組みを用いるにせよ，詳細な言語事実の観察と分析はその前提である。その点で本論文は，実証科学としての言語学の基本を十分に踏まえたものとして評価できる。

本論文の中心課題は，「～あげる」と～upに見られる多義性に統一的な解釈を与えようというものである。そのために本論文では，認知言語学で一般に用いられるイメージスキーマを援用するが，それに先立って「プロトスキーマ」という独自のモデルを提案している。これはイメージスキーマの元になる基本的なモデルである。イメージスキーマが時間軸にそった事象の変化をイメージ図で表すのに対して，プロトスキーマはある単一時点での状態をイメージ化したものとして提示される。本論文ではこれを用いて，まず検討される構文の基本的な図式，また英語と日本語の相違点を明示的に示そうと試みている。このプロトスキーマというアイディアは，さらに練り上げる必要があると考えられるものの，認知意味論的分析の枠組みを広げる上で，今後有効性を発揮する可能性を示唆していると考えられる。

本論文においてもっとも特筆すべきは，「起点—経路—目標のスキーマ」と，メトニミー，メタファーの概念を用いて，「～あげる」と“～upの表すさまざまな意味を関連づけ，VERTICAL（AGERU-1, UP-1），GOAL-ORIENTED（AGERU-2, UP-2），CONVENTIONALIZED（AGERU-3,UP-3)という図式で提示している点である。これによって，当該構文のさまざまな用法が，本来の意味からメタファー的意味，さらにメトニミー的意味へと拡張していること，また従

来は「完了」あるいは「強調」などとされながら相互の関係が曖昧なままに残されていた多義性が，「起点—経路—目標」のイメージスキーマのどの部分が焦点化されているかによる違いから生じていること，などが明確に主張されている。

本論文は，「～あげる」と9～ up という日本語，英語それぞれただ一つの表現に限定して論じられたものであるが，本論文に示されている手法や認知言語学上のアプローチは，その他の複合動詞や不変化詞—動詞構文にも十分適応可能なものと考えられ，今後の分析の展開が期待される。

認知言語学のアプローチとしては，本論文が用いている枠組みは比較的基本的なものであるが，それはまた汎用性が広いということでもあり，対象言語を変えてさらに同種の研究を拡大する可能性も示している。

プロトスキーマの定義や，イメージスキーマに先立ってプロトスキーマを定めることの意義についての記述がやや曖昧であること，また焦点化のプロセスを示したイメージスキーマの表示に精密さが欠けることなど，課題とすべき問題は残しているが，認知意味論を援用して，これまで明らかにされてこなかった多義性の問題に一つの解釈を提示した点で，本論文はこの領域における新たな貢献であると認めることができる。

本申請者が学んだ文化・地域環境学専攻，文化環境言語基礎論講座の目的は，人間と文化環境との関わりにおいて自然言語のあり方を解明しようというものであり，本論文はその主旨に沿った基礎的研究として評価されるものといえる。そしてまた，将来の研究の発展を多く含む価値あるものと判断される。

よって，本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成18年１月25日，論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果，合格と認めた。